

中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景 — 母語との対照からの仮説設定 —

渡邊 亜子

要 旨

中国語を母語とする中・上級日本語学習者の日本語の談話には、比較的多くの受身文が使われているが、その用法はかならずしも適切ではない。本稿では、学習者の日本語受身文の使用実態と母語の影響についての考察を、談話レベルの発話資料を使っておこなった。

考察に際しては、学習者と日本語母語話者の日本語受身文の用法を比較して学習者の日本語受身文の使用実態を明らかにし、さらに学習者の日本語受身文と母語での表現とを対照して、母語の影響の有無について調べた。

その結果、談話レベルの学習者の日本語受身文には、正用、誤用、「非用」、「運用未習による非使用」の実態がみられ、これらの背景には、日中両言語の受身文の構文的・語用的相違が影響していると考えられるものと、母語の影響によるものではないと考えられるものの二つがあることがわかった。この結果から、学習者の日本語受身文の使用実態と背景の仮説を設定した。

[キーワード] 使用実態 母語の影響 談話レベル 発話資料 視点的受身文

1. はじめに

1.1 なぜ中国語母語話者の日本語受身文の使用実態を考察するのか

1991年・92年におこなったドイツ語・韓国語・中国語をそれぞれ母語とする中・上級日本語学習者の談話展開の実態調査で、ドイツ語母語話者の受身文延べ使用数は、談話総数40（談話種類8×5名）中3例、韓国語母語話者は8例と少なかった。これに対し、中国語母語話者は26と多く、日本語母語話者（以下日本語話者）の30に近い数値であった。26の受身文には、不適切な表現のほか、誤りとは言えないが不自然に感じられるものや、日本語話者が受身文にしている表現を能動文で表す傾向も多くみられた。

このような中国語母語話者の日本語受身文の運用上の問題を解決する糸口をみつける方法として、使用実態とその背景の全体像をとらえることが有効ではないかと考え、考察を試みた。

1.2 先行研究

中国語母語話者（以下学習者）の日本語受身文についての調査研究は、緒についたばかりである。顧・徐（1980）は、学習者の作文の誤用を分析し、誤用の背景に母語の影響があることを指摘した。馮（1993）は日中受身文を、主語・非主語の種類や動詞の種類などから、7つの相違部分と5つの共通部分にまとめ、これらを使って調査を行った。その結果、「第2言語と母語と共通部分の学習には母語による促進的影響があり、相違部分の学習には干渉的影響があることが確認された」と報告している。この研究により、学習者の母語は誤用ばかりでなく、正用にも影響していることが明らかになった。その後、田中・館岡・田部井（1994）が、学習者の日本語受身文の習得調査で、中国語母語話者には正用・誤用のほかに間接受身の「非用」（本稿の「持ち主のうけみ」・「第三者のうけみ」に該当する）があり、これは母語の影響によるものであると報告している。

現在の学習者の日本語受身文の使用実態についての研究は、正用・誤用・「非用」の背景に母語の表現が関係しているにとらえる流れになっている。

1.3 本稿の位置付けと目的

本稿は先行研究の流れに沿うものであるが、従来の調査・研究方法とは次の3点においてことになっている。ひとつは、これまで日中受身文の構文的相違に主眼がおかれ、この観点から考察がなされてきたが、この研究では談話レベルにおける受身文の使用実態について考察する。もうひとつは、先行研究の多くの言語資料は作文や選択回答式による書かれたものであるが、本稿では学習者および日本語話者の実際の発話資料を使って考察をおこなう。いまひとつは、学習者の日本語受身文と母語との関係の有無について、従来は日中受身文の対照研究に基づいた推測によるもの、もしくは集団レベルでの統計の結果から影響があると判定する方法が主であったが、ここでは学習者個人レベルの日本語受身文と母語の表現とを直接対応させて調べる。

以上の方法で考察をおこない、学習者の日本語受身文の使用・非使用実態を全体的にとらえ、その背景の仮説を設定することが本稿の目的である。

2. 言語資料の種類と収集方法

言語資料 I：調査期間は1991年10月～1992年6月である。言語資料は、大学・大学院在学中の中・上級日本語学習者と日本語話者各5名の被験者に、個別

面接法で4コマ漫画（資料）を見せて内容を説明してもらい、それを録音して収集した。発話資料の種類は、日本語話者の日本語、学習者の日本語と母語の3種類である。言語資料Ⅰは、この談話展開の発話資料を文字化し、受身文が使われている表現を抽出したものである。この言語資料Ⅰを使って学習者の日本語受身文の使用・非使用実態と、その背景の仮説を設定する。

言語資料Ⅱ：言語資料Ⅰで設定した仮説を、異なる言語資料で確認するために、中国の小説の原本と訳本⁽¹⁾から、言語資料Ⅰと質的に近いと思われる話しことばの受身文を抽出したものである。中国語の受身文は、受動マーカー“被”のある構文と、“被”のない自然被動文の二種類である。

3. 考察

3.1 学習者の日本語受身文の使用実態

言語資料Ⅰで使われている学習者の日本語受身文の実態をあきらかにするために、日本語話者の受身文の用法と比較したところ、表-1のように正用・誤用・「非用」・その他の4タイプに分類できた。表-1は、学習者と日本語話者の表現の比較から判定した受身文の使用実態と、受身文が使われている漫画の番号をまとめたものである。数字は延べ使用数を表している。

表-1 学習者の日本語受身文の使用実態

タイプ	学習者	日本語話者	正用・誤用・「非用」・その他	漫画の番号
A	受身文 8	受身文 9	正用	①③⑥⑧
B	受身文 8	表現なし	正用	①③④⑤⑥⑦
C	受身文 10	自動詞文	誤用	②③⑤
D	能動文	受身文 21	非用・その他	③④⑤⑦
日本語受身文計	26	30		

《Aタイプ》

学習者の日本語受身文は正用で、かつ用法が日本語話者と共通しているものである（言語資料-1）。受身文の数は、日本語話者が漫画①で3例、漫画③で3例、漫画⑥で1例、漫画⑧で2例である。学習者の方は、漫画①では同一場面で4例と多く、漫画③では2例、漫画⑥⑧では各1名ずつで計2例である。使用受身文の種類は、日本語話者が「直接対象」、「第三者」、「持ち主」の3種類の受身文であるのに対し⁽²⁾、学習者は「直接対象」だけである。

言語資料-1 日本語話者と学習者の受身文の例

・日本語話者の例

- ① J-4 ぜんぶねずみにひきちぎられてしまっている。 (「直接対象」)
③ J-1 きにつながれたいぬが・・ (「直接対象」)
⑥ J-2 りょうがわのひとにおおきくしんぶんをひろげられてしまった。 (「第三者」)
⑧ J-3 おばあさんにてをひかれて・・ (「持ち主」)

・学習者の例

- ① C-2 ぜんぶねずみにたべられてしまったんじゃないですか このおか
ねが (「直接対象」)
③ C-4 いっぴきのいぬがきにしば(ら)れています (「直接対象」)
⑥ C-5 スペースですね さゆうのふたりにとられて (「直接対象」)
⑧ C-5 そのおこさんは・・おばあさんに・・つれられて・・ (「直接対象」)

《Bタイプ》

学習者の受身文は用法上問題はないが、日本語話者にはみられないものである(言語資料-2)。受身文の数は各場面1例ずつで、Aタイプのように学習者の受身表現が同一場面に集中するような使い方はない。受身文の種類はAタイプよりも多く、「直接対象」(4例)、「持ち主」(2例)、「第三者」「相手」(各1例ずつ)の4種類である。

言語資料-2 学習者の日本語受身文

- ① C-5 ぬすまれることがなかりうとおもったんでしょう (「直接対象」)
③ C-3 カラスにみられて (「直接対象」)
④ C-5 このガラスまどにきをうばわれてしまった。 (「持ち主」)
C-5 クリスマスのかざりがかざられている (「直接対象」)
⑤ C-1 そのぶたはプラスチックとかそういうものでつくられたものだ
と (「直接対象」)
⑥ C-5 しんぶんをだされて (「第三者」)
⑦ C-4 あるおじさんがあのおじさんのおばさんにめいじられて (「相手」)
C-5 ころをうばわれてみいていたのは・・ (「持ち主」)

《Cタイプ》

学習者の日本語受身文は誤用である（言語資料-3）。漫画②は、顔を写す行為者が物（茶筒）であるため日本語では受身文にならないものである。この場面での学習者の誤用は4例みられる。漫画③も同様に、ひもを持つ行為者がいない場面で使われ、日本語では受身文にならない。この場面での誤用は5例みられる。このように、漫画②③には同一場面に学習者の誤用が集中している。漫画⑤は、「視点の一貫性」（久野 1978）の談話法規則のルールに反したもので、誤用は1例である。

言語資料-3 学習者の日本語受身文の例

- ② C-2 へんのかおがうつされて
- ③ C-3 ひもでとめられちゃった（行為者がいない場面で）
- ⑤ C-4 こわされたガラスのペンしょうだいとして・・・はらいました

《Dタイプ》

日本語話者が受身文で表現している場面を、学習者は能動文で表現したり、あるいはその場面を説明する表現がないというものである（言語資料-4）。日本語話者が使っている受身構文は、「直接対象」（10例）、「持ち主」（7例）、「相手」（4例）の3種類である。これらの3種類の受身文は、学習者はすでに初級・中級で学習済みであることと、語彙および受動態の作り方についても学習済みであることから、「学習していながら使用にいたらない表現形式」（水谷 1985）である「非用」になる可能性がある。紙幅の関係から、「非用」であるかどうかの検討は各構文について1例ずつあげて簡単におこなう。

言語資料-4 日本語母語話者の受身文と学習者の表現の比較の例

- ⑤ J-5 (こども) (おあさん) おかねを・・・とられる。 (「持ち主」)
C-5 おかねですね おかあさんがもらおうとしているんです。
- ⑦ J-1 おくさんにおにわのそうじしなさいよっていわれて (「相手」)
C-3 おかあさんはおとうさんににわではたらけといって
- ④ J-4 (こども)ものがみえないようにされてしまった。 (「直接対象」)
C-2 (おあさん)にもつみたいに(こども)もってかえた。

日本語話者と学習者の表現を比較すると、日本語話者5名中4名が「持ち主」(「～に～を～られる」)と「相手」(「～に～られる」)の受身文をつかっているが、学習者は1名も使っていない。このことから「持ち主」と「相手」の受身文については構文的に「非用」の可能性が考えられる。⁽³⁾しかし、「直接対象」については、学習者がAタイプとBタイプで「直接対象」の受身文を多く使っているため、構文的に「非用」とはいえない。

では、なぜ学習者は、構文的には学習済みである「直接対象」を使わずに能動文で表現しているのか。これについては、学習者と日本語話者の受身文の運用の違いが関係していると考えられる。日本語話者には、複数の人物が登場する談話で、あるひとりの人物に〈注視点〉を維持して展開していく過程で受身文を多く使う傾向が見られる。このように日本語の受身文は談話展開の話者の「視点」と関係しているが、学習者には能動文を使って複数の人物を主語にたてて展開していく傾向がみられる(渡邊1993)。この日本語の「視点的受身文(仮称)」⁽⁴⁾は日本語学習の学習項目にはなく、未習であると思われるので、「直接対象」の「非用」は成立しない。このような非使用実態を「運用未習による非使用(仮称)」とよぶ。

以上、学習者の日本語受身文を日本語話者の使用実態と比較し、4つのタイプに分類して考察した結果、日本語話者と共通の正用、学習者だけが使っている正用、誤用、そして学習者が使っていない「非用」、「運用未習による非使用」の5つの実態が確認できた。そこで、つぎにこれらを学習者の母語の表現と対照し、それぞれの実態の背景を探る。

3.2 学習者の日本語受身文と母語での表現との対照

学習者の母語の表現の例は、3.1でとりあげた日本語受身文と対応しているので参照されたい。なお学習者の母語の受身文は、“被”のある受身構文と“被”のない自然被動文の二種類である。

《Aタイプ》－日本語話者と共通した用法－

学習者の母語の表現と対照したところ、母語の表現は全て受身文であった。母語の受身文はいずれも“被”構文である(言語資料-5)。このことから、Aタイプは、母語の受身文の影響を受けたもので、日中の受身表現の用法と構文が同じであることから、正用になったと考えられる。⁽⁵⁾

言語資料-5 学習者の母語の表現の例

- ① C-2 錢全 被 老鼠 給 吃光了。(他3名受身文)
- ③ C-4 有只狗 被 綁在樹下。(他1名受身文)
- ⑥ C-5 他的空間 被 旁边兩個人給占了。
- ⑧ C-5 他就變成 被 老大娘 擽着過馬路了。

《Bタイプ》－日本語話者と共通した用法ではないが正用－

学習者の母語の表現と対照した結果、二つの背景がみられた。ひとつは、母語が能動文のものであり、ひとつは日本語受身文に対応する表現がないものである(言語資料-6)。このことから、Bタイプは母語の影響によるものではなく、学習者がそれぞれ個別に獲得した知識ととらえてよいのではないかと考える。

言語資料-6 学習者の母語の表現の例

・能動文

- ① C-5 錢放在那儿保險, 安全。
- ③ C-3 烏鴉看見綁在樹邊的狗,
- ④ C-5 小孩呢, 對外面的這個玻璃窗的看入迷了。

・対応する表現がないもの

- ④C-5、⑤C-1、⑥C-5、⑦C-4、⑦C-5

《Cタイプ》－誤用－

Cタイプには二つの背景がみられた(言語資料-7)。ひとつは母語の表現も受身文というもので、漫画②と③では10例のうち9例が母語も受身文であった。母語の受身文の種類は、漫画②ではすべて“被”のない自然被動文で、漫画③は“被”構文の受身文と自然被動文の2種類あった。これをC1タイプとする。もうひとつは、母語は能動文であるというものである。これはC2タイプとする。C1タイプは、日本語では受身文が成立しない場面にもかかわらず、学習者が母語の発想で日本語も受身文にしたものであり、母語の影響による誤用と考えられる。C2タイプは、母語の表現では“壞掉的玻璃”と能動文でと表し、受身文にはなっていない。このことから日本語受身文の誤用は母語の影響によるものではなく、学習者が獲得した日本語の受身文の知識を誤って運用したものであると考えられる。

言語資料7 学習者の母語の例

・C1タイプ

② C-2 那茶葉缶 照出来 的，正好是凹面鏡嘛，照出很醜的樣子，
(他4例受身文)

③ C-3 狗 被 樹綁着，・・・(他4例受身文)

・C2タイプ

⑤ C-4 来作為賠償壞掉的玻璃窗的修理費。

《Dタイプ》—学習者が使っていない受身文—

日本語話者が使っていて学習者が使っていない受身文については、3-1での考察の結果「非用」と「運用未習による非使用」の二つにわけられたが、日本語が能動文のものは母語もすべて能動文であった(言語資料-8)。このことから、学習者の日本語受身文の「非用」および「運用未習による非使用」の背景には、母語の能動文の表現が関係していると考えられる。

言語資料8 学習者の母語の表現の例

・「非用」

⑤ C-5 但是這錢他却得不到，因為他的媽媽来找他要錢了，向他伸出手来要錢回去。(おかあさんが・・・お金を要求する)

⑦ C-3 有一天，那个主婦对着她丈夫說，“你去把庭園的草割一下”
(おくさんがご主人に言う)

・「運用未習による非使用」

④ C-2 (母親)像拎包裹一樣把他拎回去了。

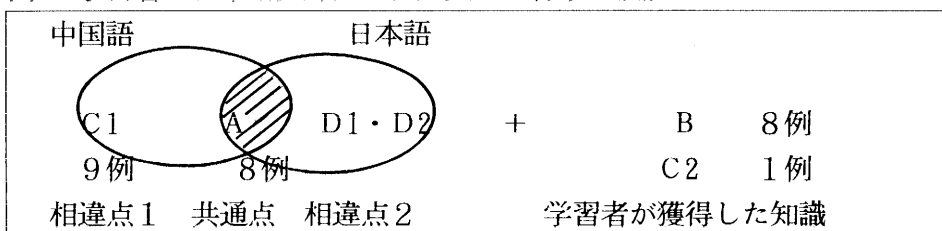
3.3 言語資料Iのまとめと仮説

3.3.1 学習者の日本語受身文の使用実態とその背景—仮説—

これまでの考察をまとめると、学習者の日本語受身文の使用実態とその背景は、A～D2の6つの実態となる。この6つのタイプから仮説を立てると図-1のようになる。図-1は、使用・非使用実態には、日中受身文の構文的・語用的関係を背景としたものと、学習者の獲得した知識を背景としたものの2種類があることを示している。数値は学習者の日本語受身文の使用数である。

- 正用(A): 母語の受身文の用法 = 日本語の受身文の用法 → 共通点
 誤用(C1): 母語の受身文の用法 ≠ 日本語の受身文の用法 → 相違点1
 「非用」(D1): 母語に受身文の用法0 ≠ 日本語の受身文の用法 → 相違点2
 「運習」(D2): 母語に受身文の用法0 ≠ 日本語の受身文の用法 → 相違点2
 正用(B): 母語の影響によらない正用の日本語受身文 → 獲得知識
 誤用(C2): 母語の影響によらない誤用の日本語受身文 → 獲得知識

図-1 学習者の日本語受身文の使用実態の背景の仮説



3.3.2 仮説の確認

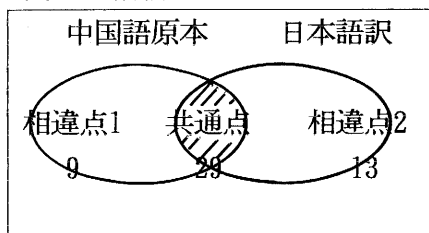
ここでは、3.3.1でたてた図-1の仮説のうち、中国語と日本語の受身文の運用上のかさなりとずれが言語資料Ⅰと同じように言語資料Ⅱでもみられるかどうかを調べる。言語資料Ⅱの原本と訳本の受身文を対照し(言語資料-9)、原本では受身文で訳本は能動文であるもの、原本も訳本も受身文であるもの、そして原本は能動文で訳本は受身文というものを抽出した。表-2は中国語・日本語の受身文の出現数を示したものである。原本で使われている中国語の受身文の総数は50であった。

表-2から、立間・中山の両訳で、中国語の受身文を日本語でも受身文にしている表現がかなりある一方で、中国語の能動文を日本語では受身文にしている表現も多くみられること、そして、中国語の受身文を日本語では能動文にしている表現もあることがわかる。また、図-2は、立間・中山の両者に共通した訳から作成したものであり、数値は両者共通の受身文の数である。相違点1は、原本は受身文で訳本は能動文のもの、共通点は原本も訳本も受身文のもの、相違点2は原本は能動文で訳本は受身文のものである。図-2から、言語資料Ⅰとおなじ重なりとずれが言語資料Ⅱでもみられることがわかる。したがって、母語と日本語の関係から生じる誤用は相違点1を、正用は共通点を、そして「非用」・「運用未習による非使用」は相違点2を背景にしているといえるのではないか。

表-2 中国語と日本語の受身文の数の比較(言語資料Ⅱより)

中国語	⇒日本語 受身文	
	立間訳	中山訳
受身文 50例	31例	38例
能動文	38例	42例
受身文 50例	69例	80例

図-2 日中受身文の重なりとずれ



言語資料-9 『駱駝祥子』の原本と訳本の対照例 (“教” = “被”)

(原本:受)~, 他与三匹駱駝的關係由夢話或胡話中 被 人家聽了去。

(訳本:能)~, うわごとかなにかで、自分とらくだの關係をしゃべって
いたらしい。 -立間訳

(原本:受)你不記得当初你 教 我們拉到西山去?

(訳本:受)西山にひっぱっていかれたときのことをわすれたのかよ。 -立間訳

(原本:能)~, 都不等他們吩咐他~

(訳本:受)彼は何も言われなくても~

-立間訳

(原本:能)凭着什麼把他的車白白搶去呢?

(訳本:受)あのおりなんのいわれもなく (車を) もぎとられてしまった
じゃないか。 -立間訳

(原本:能)現在要, 他要不罵出你的魂来才怪!

(訳本:受)いまもらいにいこうものなら、きっと無茶苦茶に怒鳴られて、-中山訳

3.3.3 母語の影響をうけていない学習者の日本語受身文

図-1に示すように、学習者の日本語受身文には母語の影響によると思われるものの他に、母語の影響を受けていないと思われる正用8例・誤用1例の受身文があった。正用の8例の受身文は、無生物を主語にしていたり、複数の人物を能動文で表現して展開していく「中立視点」(渡邊 1992)の展開過程で使われていたりするため、日本語話者の談話レベルの用法とはややことなる感じを受けるが、誤用といえる範疇ではない。また、誤用の1例は、この1例だけでは断定できないが、受身文の名詞修飾の知識を誤って運用したと考えられる。いずれにしても、学習者のこのような母語の影響によらない日本語受身文は、学習過程で獲得した知識として位置付けることができよう。

4. まとめ

談話レベルの発話資料で、学習者と日本語話者の日本語受身文の用法を比較し、さらに学習者の日本語受身文と母語の表現とを対照した結果、学習者の日本語受身文の使用・非使用実態の全体像と背景は、図-1のようになった。

使用実態とその背景については、馮の「第2言語と母語の共通部分の学習には母語による促進的影響があり、相違部分の学習には干渉的影響がある」という指摘は正しく、本稿でも同様の結果がみられた。しかし、実態の方からとらえると、学習者の日本語受身文はすべてが母語の影響をうけて生成されるのではなく、日本語学習の過程で個別に獲得した知識から生成されている実態もみられ、これは中・上級レベル学習者の日本語学習途上の習得状況の一つとして興味深い。非使用実態については、田中らが指摘した間接受身のほかに、「相手」の受身文の「非用」もみられた。また、日本語話者の「視点的受身文」の用法から生まれる学習者の非使用実態もとらえられた。

最後に、学習者の日本語受身文の使用数が多かったことについては、日中受身文には構文的・語用的に重なるところがかなりあることから、学習者は日本語の受身表現を母語の体系から構築していき、それが日本語受身文を多く使うことと結び付くのではないかと考えられる。以上の実態から、中・上級レベルの日本語教育では、日本語の人称受身文は構文的には話者の立場から出来事を語る「立場志向」(水谷 1985)と関連し、話しことばの談話レベルでは「視点的」原理と関連していることを、学習者に意識させることが効果的ではないかと考えている。

5. おわりに

学習者の日本語受身文の「非用」および「運用未習による非使用」の検討については、紙幅の関係から詳しく述べることができなかった。これについては別稿に譲り、くわしく検討をおこないたいと考えている。また、使用実態の全体的背景の仮説については、今後さらに日中受身文の談話レベルでの用法の原理をとらえて、より詳しいモデルを作りたい。

謝辞 中国語の文字化の作業にあたりお茶の水女子大学の周念麗さんにご協力いただきましたこと感謝申し上げます。また、学習者の中国語の自然被動文については楊凱榮先生に、『駱駝祥子』の自然被動文については郭雲輝さんにご助言いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 原本は老舎の『駱駝祥子』(1937)、訳本は立間祥介訳(1980岩波文庫)、中山高志 訳 中山 時子監修(1991白帝社)、の2冊を使用した。
- (2) 受身文の分類は鈴木重幸(1972)にしたがった。なお、紙幅の関係から、「～のうけみ」という部分は省略し、ひらがなは漢字に置き換えた。ここで使う「直接対象のうけみ」は一般に直接受身文とよばれるもので、「持ち主の受身文」「第三者の受身文」は間接受身文とよばれるものに当たる。
- (3) 学習者C-4がBタイプで使っている「命じられる」という受身表現は、範疇からいうと「相手のうけみ」に入るが、劉(1991)によれば、中国語の「命令」という表現は母語で受身形になる表現であるとある。したがって、「命じられる」については母語の影響による表現の可能性が考えられ、「相手の受身」の「非用」の判定の対象から外した。また、BタイプでC-5が使っている2例の「持ち主」の受身文は、「うばわれる」という同じ動詞であり、他には「持ち主」を使っていないことから、「持ち主の受身」の判定の対象から抜いた。
- (4) 日本語の「間接受身」も日本語の受身文の原理からみれば「視点的受身」に含まれると筆者は考えるが、ここでは、学習者の日本語にはみられない受身文で、日本語話者が使っている「直接対象」の受身文を、他の受身文の種類と区別するために便宜的に「視点的受身」とした。
- (5) 正用・誤用の範疇に入らない「非用」現象も母語と関係しているので、“正(負)の転移” “干渉” という表現は使わず、“母語の影響”にした。

主な参考文献

- 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』麦書房
久野 暉 1978『談話の文法』大修館書店
顧海根・徐昌華1980「中国人学習者によくみられる誤用例—疑問詞用法と受身文を中心に—」『日本語教育』41 日本語教育学会
奥津敬一郎1983「何故受身か?—〈視点〉からのケース・スタディー」『国語学』132 国語学会
大河内康憲1983「日・中の被動表現」『日本語学』4 明治書院
水谷信子 1985『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
楊 凱栄 1988「文法対照的研究—中国語と日本語—」『講座 日本語と日本語教育』5 明治書院
劉 素英 1991「受動表現における日中言語の比較」『ことば』12 現代日本語研究会
渡邊亜子 1992「日本語学習者の談話における視点—ストーリーテリングによる調査の分析—」『日本語教育学会 予稿集』
金水 敏 1992「場面と視点—受身文を中心に—」『日本語学』11 明治書院
渡邊亜子 1993「中・上級日本語学習者の談話展開—「視点」と接続表現からの考察—」日本語シンポジウム『言語理論と日本語教育の相互活性化』予稿集
水谷信子 1993「「非用」と談話の展開」『日本語学』12 明治書院
馮 富栄 1993「日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について」Japanese Journal of Educational Psychology 41 日本教育心理学会
田中真理・館岡洋子・田部井圭子 1994「中・上級日本語学習者の“ねじれ文”について」『日本語教育学会春季大会 予稿集』日本語教育学会

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻2年)

資料

使用した漫画の出典

①②④⑥⑦ 長谷川町子『サザエさん』姉妹社

③ Dechert, Hans W. (1983)

"How a story is done in a second language",
in C. Faerch & G. Kasper ed.

Strategies in Interlanguage Communication. Longman.

⑤⑧ 植田まさし『コボちゃん』蒼風社

